第 66 回日本医学図書館協会総会

山口直比古*

東邦大学医学部図書館

第 66 回日本医学図書館協会総会が平成 7 年 5 月 18 日 19 日と、神奈川県川崎市のホテルザエルシーを会場として開催されました。

昨年の第 65 回総会において、会則が大幅に改正され、総会の開催は当番館制から地区担当の持ち回りとなりました。本年は関東地区が当番となりましたが、その中で聖マリアンナ医科大学が代表館となり、開催のお世話をいただきました。総会の内容につきましては、地区代表館、関東地区評議館、それに協会の数人の理事からなる組織委員会を設置し、そこで検討をしていくような形になりました。特別講演などの企画も、組織委員会で決定されました。

初日は司書会議、二日目が館長先生をまじえての総会という基本的なスタイルは変わっていませんが、教育研修という要素を大幅に取り入れ、テーマディスカッションや講演などが行われたのが今総会の特色であったと思います。

開会にあたっての川村会長の挨拶の中でも、直前にアメリカのワシントンで開催された第 7 回国際医学図書館会議での印象をまじえながら、日本医学図書館協会の今後進むべき方向について触れられ、真に日本を代表する医学・医療情報サービスの担当者を集まりたるべく努力を怠ってはならない、と述べられました。そうした意味合いから

も、熱気に満ちた総会が期待されたのですが、質疑はいまひとつ盛り上がりには欠けていたという印象は否めません。理事会として運営方法も再検討しなければならないだろうと考えております。

ビジネスミーティングである初日午前中の司書会議では、平成 6 年度の事業報告、決算、平成 7 年度の事業計画案、予算案のいわゆる定例 4 議題のみが協議題であり、さしたる質疑もなく終了しました。しかしながら、医学洋書総合目録が従来の書店さんへの委託ではなく、自主出版に切り替わるなどの大きな変化もあり、例えば平成 6 年度収入の部の決算額が合計 5,500 万円であったのに対し、平成 7 年度予算案では 7,500 万円にふくらんでいます。支出の部でも同様の現象が起きています。つまり、購読料収入も出版経費も大幅に増加しているのです。ここいらへんをよくご理解いただけたのかどうか、いささか心配な面もあります。

午後は「メディア多様化時代と医学図書館」と題して、テーマディスカッションが行われました。学術情報センターの安達教授を基調講演にお迎えし、「電子図書館へのシナリオ」と題してお話いただきました。これまで、印刷された情報が「情報」であると考えられてきた図書館の世界に、電子化された情報が、しかもネットワークを介して提供されてくるであろうという近未来予測は、大きな衝撃を与えます。図書館へ来なくとも情報が入手できる時代が来ようとしているのです。わ

*Naohiko YAMAGUCHI : 〒143 東京都大田区大森西5-21-16.

(1995 年 6 月 30 日 受理)

れわれ図書館員は、今、なにをすべきなのでしょう。続いて3人の事例報告者により、新しい技術などについての報告がなされました。こうした討論にあえてシンポジウムという名称ではなく、テーマディスカッションという新しい名称を与えたのは、これらの講演や報告をとおして、われわれの進むべき方向というものを少しでも具体的に、眼に見える形で明らかにしたい、そのために多くの参加者の方々のお考えをお聞きしたいという意図があったからです。このディスカッションのみの参加者（とくに若い医学図書館員）を募ったのも、そのためだったのです。しかしながら、各報告者の報告に熱が入り、実質的な質疑の時間がわずかなものになってしまったのは、本当に残念でした。

この後、第7回国際医学図書館会議の報告と、韓国の医学図書館の現状についての報告がありました。いずれの報告も総会議事録には収録されるのですが、前者につきましては参加者の報告が、「医学図書館」をはじめとする様々な雑誌等に発表されるでしょうし、後者につきましては、現在計画中である「医学図書館」のInternational Issueに改めて投稿していただく予定です。

二日目は総会です。開会式では文部省や韓国医学図書館協議会よりの来賓のご挨拶をいただいたほか、物故者への黙祷が行われました。昨年从今年にかけて、現職の医学図書館の仲間2名が物故されました。まことに残念なことです。

続いて、議題審議に入りました。司書会議での定例4議題のほかに、会則のなかの細則の改正が事務局より提案され、承認されました。これにより、協会への加盟の際の入会金が減額されました。病院図書室を始めとする多くの医学情報関連機関に加盟していただきたいとの意図です。

昼食に引き続き、「インフォームド・コンセントと医学情報提供」と題して、東京慈恵会医科大学の橋本教授の講演が行われました。患者さんへ

の情報提供サービスが、医学図書館にとってどのような重要性を持っているのかは、われわれにとっての重大な関心事ですが、いまだにこれといった結論は出てはいないように思います。しかしながら、アメリカでの趨勢を見るまでもなく、近い将来積極的に患者さんへの情報提供に関わってゆかなければならないことは明らかでしょう。橋本先生の講演も、そうした前提に立って、医学図書館員の心構えについて最後に触れています。それを要約しますと、① 親切な対応、② 求められた情報の内容を尋ねる、③ できるだけその要求に応える、④ 高度な専門書を読んだときに生じやすい誤解について説明する、⑤ 主治医との対話が重要であることを説明する、というものです。こうした対応をするにあたっても、患者さんにとってどうすることが最も良いことなのかを一緒に考えながらことにあたるのが大切であると締め括られています。大変に示唆に富んだ講演であったと思います。これも総会議事録に掲載されますので、ぜひお読みいただき、考えていただきたいと思います。

総会の最後を飾ったのは、聖マリアンナ医科大学の学長である長谷川先生の「アルツハイマー病への対応」という特別講演でした。一見、医学図書館の活動とは無関係のテーマのようにもみえますが、こうした機会をとらえて、医学知識をわかりやすく解説していただくことは、とても大切であると思います。長谷川先生のお話は、アルツハイマー型といわれる痴呆と他の一般的な老人性痴呆との鑑別にはじまり、先生ご自身の開発された診断法について説明されました。その中で、喫煙者にアルツハイマーが少ないとのデータがあると発言された際には、会場が一瞬どよめきました。もっとも、続けて、そうした人は肺癌で死亡する割合のほうが高いでしょうね、とおっしゃられ、会場の笑いを誘いました。質疑応答では、会場より「発展途上国ではアルツハイマーが少ないとい

うデータがあるようだが、どうなのでしょう」という質問が出ましたが、「それらの国ではまだ高齢化社会が来ていないので、病気になる前に死亡しているのかもしれない」と回答されるなど、長谷川先生のお話は、大変にわかりやすく、今後の業務にも役に立つものでした。

以上で総会は終了したのですが、最初にも述べましたとおり、全体的には論争の少ない静かな総会であったと思います。しかしながら、会員一同が会するのは年に一度のこの総会のみですので、建設的な意見を大いに出していただき、真剣な討論の場としたいというのが私の願いでもあります。現在の日本医学図書館協会の活動方針は多くの場

合理事会で決めています。理事会の決定が必ずしも最善の結論であろうとは、理事の全員が考えてはおりません。日ごろ利用者と直接に接している若い医学図書館員の方たちが、現在の協会の活動をどう考えていらっしゃるのか、ぜひともお聞きしたいところです。そうしたひとりひとりの考えが協会の活動に反映するような総会を開催できるよう、これからも努力を重ねてゆきたいと思っています。

最後になりましたが、地区代表館として、総会の開催に多くの人材と労力をさいてくださった聖マリアンナ医科大学の鈴木館長をはじめ、スタッフのみなさまに厚くお礼申し上げます。

(日本医学図書館協会総務・渉外担当理事)